

『東京美術学校校友会月報』記事抜粋

東京美術学校近事 〔一八一七。大正八年。一月二〇日〕

○職員辭令

任東京美術学校助教 (十二月十八日)

除服出仕 (同月二十日)

(各通)

敘從七位 (同月同日)

京都府及石川縣へ出張を命ず (同月二十六日)

復職を命ず (同月同日)

○職員動靜

○古宇田實氏 兼て文部省外國留學生を命ぜられたるが、舊臘廿八日本邦出發、留學の途に上らる

○白濱徵氏 文部省視學委員として、十二月十四日より十日間富山縣へ出張せらる

○柳生常次郎氏 本郷區駒込東片町百四十三番地へ轉居

○神矢教親氏 府下西巢鴨町池袋一〇九二へ轉居

○小泉勝爾氏 十二月十一日嚴父を喪はる 痛悼の至りなり

○長原孝太郎氏 一月十二日母堂を喪はる 痛悼の至りに堪へず

助手 戸部 隆吉

助教 小泉 勝爾

教授 津田 信夫

同 清水 龜藏

書記 北浦 大介

休職助教 伊東 亮次

○戸部隆吉氏 一月七日東京女子高等師範學校講師を囑託せらる

○生徒募集 本年四月入學せしむべき各科生徒左の通り募集す 志願者は心得に依り本校に願出づべし

規則書並に志願者心得入用者は本校教務掛に出頭又は郵便切手貳錢を添へて申出づ可し

科	月	備	豫
日本畫科			廿人
西洋畫科			卅五人
彫刻科		木彫部	七人
圖案科		第一部	十人
		第二部	七人
金工科			五人
鑄造科			五人
漆工科			五人
圖畫師範師			二十人

製版科臨時寫真科は本年度之を募集せず

東京美術学校近事 〔一八一八。T・九・二・二三〕

○職員辭令

圖案科第二部主任並理事ヲ命ス (一月十三日)

本校講師ヲ囑託ス (一月二十六日)

東京美術学校助手ヲ命ス (一月二十七日)

臨時寫真科勤務ヲ命ス

教授 神木 健介

從七位 木檜 恕二

畑 保之

紋勳三等授瑞寶章（一月三十日）

教授 黒田 清輝

岡 四郎

東京美術學校雇ヲ命ズ 教務掛ヲ命ズ（二月十日）

○職員動靜

○鹿島英二氏 一月六日相生高等染織學校講師を囑託せらる。

○鎌田彌壽治氏 文部省外國留學生として一月二十七日東京驛より出發せらる。

○菅〔原〕教造氏 「裸體と衣服に就きて」一月二十四日本校に於て講演せられる。

○中村勝治郎氏 麻布區筈町一七七に轉居さる。猶岡氏は病氣のため、引籠療養中なり

東京美術學校近事〔一八一—九。T・九・三・二〇〕

○職員辭令

講 師 北原鹿次郎  
解囑託（二月十六日）

東京美術學校雇ヲ命ズ（二月十六日） 教務掛ヲ命ズ  
北原鹿次郎

任東京美術學校助教（二月十七日）  
助教授 大石 清〔續〕

圖案科第二部製圖建築學擔任ヲ命ズ（同日）  
大石 清〔續〕

任東京美術學校教授 紋高等官七等（二月十八日）

建島彌一郎

教授 建島彌一郎

彫刻科塑造實習擔任ヲ命ズ（同日）

助手 前田 祥吾

願ニ依リ助手ヲ免ス（二月二十八日）

○濱野太吉氏 此程養父を喪はるゝ痛惜察すべし。

東京美術學校近事〔一九一—。T・九・四・二四〕

○職員辭令

三浦秀之助

ジャワ・マヅラ及スマトラ古代美術ノ調査ヲ囑託ス（三月二日）

助教授 神矢 教親

任東京美術學校教授 紋高等官七等 内閣（同日）

助教授 戸部 隆吉

學術研究ノ爲京都府滋賀縣三重縣奈良縣へ出張ヲ命ズ（同十一日）

教授 島田 佳矣

學術研究ノ爲兵庫縣へ出張ヲ命ズ（同十一日）

講 師 木檜 恕一

囑託ヲ解ク

教授 神矢 教親

金工術研究ノ爲二箇年間英吉利國佛蘭西國獨逸國亞米利加合衆國へ留學ヲ命ズ 文部省（同十五日）

文部省外國留學生トシテ本日留學ノ途ニ上レリ(同二十二日)

教授 神矢 教親

教授 大村 西崖

助教授 海野 清

同 田邊 孝次

講師 渡邊 啓三

學術實地指導ノタメ京都府及奈良縣和歌山縣へ出張ヲ命ズ(三月二十九日)

講師 鈴川 信一

學術實地指導ノタメ京都府及奈良縣へ出張ヲ命ズ

書記 藤岡福三郎

雇 青山 正治

生徒修學旅行ニ付京都府及奈良縣和歌山縣へ出張ヲ命ズ

助教 田邊 孝次

任陸軍歩兵少尉 内閣(三月二十九日)

○第二十九回卒業證書授與式 三月廿四日

午前十時本校大講堂に於て舉行さる、式は卒業生、職員、來賓の着席了るや正木校長の式辭に依つて始められ、卒業生一同の卒業證書を各科總代に授與したるや、一場の告辭を述べられ、次で文部大臣代理松浦専門學務局長は次の祝辭を朗讀せらる。

本日卒業證書授與式ヲ舉ゲラレルニ當リ一言祝詞ヲ述ベルコトハ、私ノ深ク喜ブ所デアリマス。

御承知ノ如ク我國美術ノ淵源ハ甚ダ遠イノデアリマシテ、泰西美

術ノ移入以來、一層急速ノ發展ヲ遂グルニ至リマシタコトハ誠ニ會心ノ至リニ堪ヘマセス。

サリナガラ今後益々本邦美術ノ名聲ヲ高メテ國光ノ發揚ヲ期スルニハ、一ニ美術家ノ發奮努力ニ俟タナケレバナラスノデアリマス。

諸君ハ深ク其ノ責任ノ重大ナルコトヲ自覺シテ、益々其ノ技能ヲ練磨サレルノハ勿論、特ニ品性ノ修養ト學問ノ研鑽ニ努メ、生涯ヲ斯道ニ獻ジテ其ノ大成ヲ期セラレタイモノデアリマス。

又出デ、教育ニ從事スル諸君ハ學問技術ノ研究ニ努メルト共ニ、心ヲ德操ノ涵養ニ潛メテ能ク其ノ實績ヲ舉ゲラレルコトヲ希望致シマス。

大正九年三月二十四日

文部大臣 中橋徳五郎

次に卒業生總代は次の答辭を述べ

生等本校ニ入學セン以來學校長並ニ諸先生ノ諄々タル教導ヲ蒙リ其薰化ニ浴シ各志望ノ課程ヲ完了スルコトヲ得タリ、茲ニ本日ヲ以テ卒業證書ヲ授與セラル、ノ盛典ニ方リ文部大臣閣下ヨリ懇篤ナル訓諭ヲ辱フス 洵ニ生等ノ光榮トスル所ナリ 思フニ生等今幸ニ業ヲ卒ヘント雖モ僅々美術ノ端緒ヲ領得セシニ過ギズ 苟モ此小成ニ安ンズベカラザルハ深ク自覺スル所ナリ、今後益々研鑽ヲ積ミ修養ヲ累ネ以テ美術ノ精髓ヲ究メ之ヲ發揮スルニ至ランコトヲ期ス 又出デ、教育ノ任ニ膺ルモノハ忠實職務ヲ奉シ熱心指導ノ道ニ勵ミ以テ美術思想ノ普及ニ瘁ス所アラントス 不肖卒業生一同ニ代リ聊カ蕪言ヲ陳ジ滿腔ノ感謝ヲ致シ併セテ大臣閣下ノ高諭ニ答ヘ奉ル。

大正九年三月二十四日

東京美術學校第二十九回卒業生總代 塚本 閣治

式の前夜、來賓に卒業製作の觀覽を乞ひ、式全く終へたる後記念撮影を成し、新舊卒業生は校内俱樂部に於て、懇親會を舉行したり。當日は雨天なりしも朝野の來賓陸續として來會され、頗る盛況を呈せり。尙本年度の卒業生の科別人員併に卒業生姓名及卒業製作目錄次の如し。

卒業生科別人員

科名	本科	選科	計
日本畫科	一五	二	一七
西洋畫科	二七	四	三一
彫刻科	六	一	七
塑造部	〇	一	一
木彫部	〇	〇	〇
圖案科	二	〇	二
第一部	一	〇	一
第二部	一	〇	一
金工科	一	〇	一
鑄造科	三	〇	三
漆工科	三	〇	三
製版科	七	〇	七
臨時寫真科	八	〇	八
圖畫師範科	一五	一	一六
合計	一〇〇	一〇	一一〇

卒業生姓名及卒業製作目錄

日本畫科

紅梅咲く頃	業火	盲者の春	重衡哀別	幽庭	黄昏の靜寂	朝	晚秋	四月頃	菜畑	唄なかば	早春の夕	蓮	山	早春	春深し	錦の秋	西洋畫科	自畫肖像、二人	同、林檎とる頃	同、祈の後	同、親娘	同、會堂の一隅	同、青い衣もの
本科	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	本科	同	同	同	同	同
廣川	林川	川瀬	臼井	飯田	山口	西垣	中島	漆原	松田	濱砂	安田	平兮	岡田	岡田	岡田	長谷川	足立	小堀	及川	宮本	内藤	和田	中村
操一	虎雄	忠雄	剛夫	九一	將吉	隆滿	英(一)	啓之助	茂雄	重光	信一	柳司	忠邦	季雄	秀孝	良一	稜威雄	文吾	恒平	進一郎	香苗	研一	
新潟	岡山	三重	長野	神奈川	山形	東京	岐阜	香川	大阪	宮崎	北海道	福岡	香川	香川	東京	東京	東京	東京	東京	東京	兵庫	東京	福岡

同、窓際  
 同、舞臺に立つ前  
 同、婦人坐像  
 同、小供  
 同、森  
 同、島の夕  
 同、少女坐像  
 同、マンドリン持てる  
 庭先  
 自畫肖像、小供  
 同、ゲツセマネに於けるイエスとユダ  
 同、海の悲  
 同、八木踊  
 同、夕の馬  
 同、收獲  
 同、曇り日  
 同、沼畔  
 同、劇場内  
 同、女  
 同、婦人肖像  
 同、あまへる小供  
 同、少女  
 同、懷春

同 湯川治郎 広島  
 同 服部季彦 福岡  
 同 中山巍 岡山  
 同 山喜多二郎 福岡  
 同 勝田哲三 大阪  
 同 谷口國介 香川  
 同 吉本政吉 東京  
 同 佐々木節郎 宮城  
 同 河井守秀 大分  
 同 吉岡基太郎 大阪  
 同 水平讓 秋田  
 同 坂本孝正 福島  
 同 前橋信助 栃木  
 同 人見純一 東京  
 同 武藤辰平 佐賀  
 同 江川武 宮城  
 同 金澤秀之助 秋田  
 同 佐藤恭次郎 島根  
 同 森本眞一 奈良  
 同 澁谷泰次郎 大阪  
 同 小笠原勝茨 茨城  
 選科 許敦谷 支那  
 同 胡毓桂 支那  
 同 李長元 支那

同、肖像  
 彫刻科  
 塑造部  
 神祕の聲  
 過去(男) 未來(女)  
 空行く雲  
 ハンマー  
 存在者  
 陽炎  
 おもひで  
 木彫部  
 ひさ子さん  
 春風  
 圖案科  
 第一部  
 化粧室裝飾及附屬品圖案  
 更紗壁掛圖案  
 船内談話室<sup>装</sup>裝飾及附屬品圖案  
 各種卓子懸圖案  
 自動車部内裝飾及附屬品圖案  
 各種織物圖案  
 刺繡衝立圖案  
 婦人用帶地圖案  
 更紗卓子懸圖案

同 關本勇治 神奈川  
 本科 雨宮治郎 東京  
 同 加藤鬼頭太 東京  
 同 大村安治郎 富山  
 同 武井直也 長野  
 同 中島東洋 石川  
 同 川邊繁藏 埼玉  
 選科 山本金三郎 石川  
 選科 黃土水 臺灣  
 同 長田滿也 東京  
 本科 塚本閣治 東京  
 同 梨本正太郎 東京  
 同 楠永一直 高知  
 同 中村正雄 静岡  
 同 上野正之助 富山  
 同 森田武 京都  
 同 熊田猛夫 福島  
 同 手島英雄 大阪  
 同 淺地豐治 石川

絨毯圖案

絨毯及卓子懸圖案

シヤクンタラ姫舞臺圖  
及衣裳圖案

第二部

郊外に住む「アーキテクト」の家

社會俱樂部設計圖案

歌劇場設計圖案

金工科

梅花紋樣飾筒

鑄造科

厨子

かなしきおもひ出

灌佛

漆工科

白孔雀蒔繪衝立

蠟色地欣求浄土蒔繪棚

木地蒔繪霜つきころ  
屏風

製版科

同 辻野幸吉 石川

同 中島精一 石川

同 宮崎健治 石川

本科 僊石惠四郎 島根

同 岡田捷五郎 東京

同 大瀧丈夫 東京

本科 長谷川義隆 香川

本科 北原三佳 長野

同 豊田勝秋 福岡

同 鳥山貞三 東京

本科 菊池馨 青森

同 城川重太郎 富山

同 清水正雄 神奈川

本科 柿沼保次 埼玉

同 小川省吾 長野

同 野村藤吉 石川

同 野尻榮一 富山

同 相生垣貫二 兵庫

同 津村三郎 兵庫

臨時寫真科

誰か扉を敲いて居る

五月頃

二月の午後

孫のために

露西亞の少女

紙を剪む少女

八丈ヶ島

海邊

師範科

石野祝幸 岡山

齋藤好雄 群馬

金井勝衛 群馬

原義人 長崎

大八木定治 山形

加藤龍治 宮城

宇田喜久雄 福島

利府勝吉 岩手

同 田沼米吉 東京

選科 笹川春雄 東京

本科 松尾義明 佐賀

同 河上兼士 東京

同 中山十衛 福島

同 小貫道貫 茨城

同 吉田英男 岩手

同 西村一郎 東京

同 原田良雄 山口

同 小野郁也 山形

新田維義 島根

長野新一 大分

中村中 廣島

鹿兒島兼三郎 東京

鎌田次郎 岩手

松岡銀六 三重

淺井重次 大阪

○卒業製作陳列會 三月二十五日午前九時より午後四時迄、本年度卒業製作陳列を一般に觀覽せしめたるが、雨天にも係らず、非常の盛況にて場内及下足整理の爲一時大玄關の入口を閉鎖するの止なき

に至るなど蓋し未曾有の盛況を呈せり。

○新入學生 本年度入學志望者には三月廿七日より三日間撰抜試験を施行したる結果左記の如く入學を許可せり(四月七日官報發表)

豫備科

日本畫科

愛知 本多 清	山形 眞島信太郎
北海道 長澤 菊治	東京 春木 一郎
長崎 福井 明	熊本 石井 了介
山形 成澤 嘉雄	香川 川田 直一
愛知 高柳 淳	香川 平林 春一
秋田 土田 孝吉	京都 關谷 善信
京都 木村 宗一	愛知 吉田 禎助
奈良 林 芳春	宮城 植村 克己
宮城 中村 徳治	富山 清水 憲二
東京 一噌 政治	佐賀 北島 兵一
廣島 立石 商一	東京 井上 齊
大阪 野平 上	香川 武内 英男
東京 我部 政達	香川 富田 千秋
東京 河合 孝基	東京 武田 一郎
静岡 原 進	大阪 川有智良藏
福岡 小畑 稔	福岡 阿藤眞壽夫
岩手 丹下富士男	沖繩 嘉數 能愛

彫

彫刻科

兵庫 香取 恭	千葉 松井 強
北海道 高橋 貞吉	和歌山 鈴木 重雄
新潟 高橋 善平	東京 山中 新一
東京 近藤長三郎	東京 井上 正勝
山口 俵道 陽二	三重 中村三樹男
群馬 南城 一夫	鹿児島 土岐 浩藏
東京 森脇 高行	山口 波多野勝好
青森 竹内 健藏	愛媛 野間 仁根
福岡 秦 巖	徳島 一原 五常
愛知 野崎 兼俊	高知 竹村 晋
新潟 増村 正雄	愛知 伊藤 廉
熊本 鶴野 清	兵庫 中谷 健次
廣島 高杉 正實	
彫造部	
長野 安原 新次	東京 加藤 忠雄
大阪 村田勝四郎	長野 藤澤 實
石川 東 駒太郎	香川 丸川 彰
大阪 中本秀三郎	
木彫部	
鹿児島 黒田 清徳	三重 安田 秀雄
長野 増澤 公平	東京 杉浦藤太郎
富山 吉川 次平	

圖案科

第一部

福岡 須藤 雅路

東京 山内 幸男

石川 金友 五朔

岡山 中村作太郎

岐阜 田代 完

第二部

東京 岡見 健彦

北海道 森 政三

神奈川 守屋 政雄

兵庫 新井隆四郎

金工科

岡山 中川 勝文

茨城 増淵隆四郎

東京 岡部 達男

鑄造科

岩手 鈴木 力

東京 佐藤 政男

漆工科

千葉 椎名 千里

圖畫師範科第一年級

東京 小泉 繁

青森 高橋 重雄

愛媛 青山 清

群馬 星野 愛三

香川 松田 要

東京 宮田 政雄

埼玉 平沼福三郎

東京 奥田 政徳

東京 坂田 威夫

山形 本間 正文

宮崎 永山 陽三

香川 鴨 幸太郎

香川 大須賀 喬

静岡 小川 昇

山口 吉野 晴吉

富山 田中 千秋

神奈川 石井 政雄

香川 柏原覺太郎

廣島 山本 需

愛媛 松原 一

福岡 服部 清

三重 瀧 久吉

山形 佐藤 秀夫

福岡 田中 孝市

愛知 山本 磯一

山口 山本 隆亮

大分 松山 國雄

群馬 高橋 澤三

長崎 鯨津 政男

福岡 鳥飼 龍海

新潟 大瀧 寅吉

熊本 紫垣 民雄

千葉 林 英夫

東京 石山 清隆

福島 土田 季藏

香川 長尾 徹

東京美術學校近事 (一九一二。T・九・五・二〇)

職員辭令

大正九年三月三十一日

京都府技手

岸 熊吉

奈良縣技師

阪谷 良之進

宮坂 福太郎

依願解囑

東京美術學校雇ヲ命ス 金工科勤務ヲ命ス

講師 瀧川 鼎



兼任東京商科大学豫科教授 紋高等官三等 内閣(四月一日)

教授 久米桂一郎

紋從七位 宮内省(四月十日)

教授 建島彌一郎

任東京女子高等師範學校教授 紋高等官六等 内閣(四月十四日)

講師 菅原教造

東京美術學校雇ヲ命〔ズ〕 庶務掛兼教務掛ヲ命ズ(四月十七日)

講師 木村周吉

任東京美術學校教授 紋高等官七等 内閣(四月廿一日)

講師 芳太郎

臨時寫眞科主任並理事ヲ命ズ

教授 森 芳太郎

金工科主任ヲ命ズ

教授 清水龜藏

日本畫科理事兼務ヲ命ズ

講師 鈴木信一

東京美術學校助手ヲ命ズ 日本畫科勤務ヲ命ズ(四月二十六日)

職員動靜

講師今和次郎氏 今般早稻田大學理工學部教授を囑任せらる。

東京美術學校近事〔一九一三。T・九・六・二〇〕

職員辭令

大正九年五月三十一日

塚本閣治

東京美術學校助手ヲ命ズ 圖案科第一部勤務ヲ命ズ

職員動靜

鎌田彌壽治氏 米國留學中の氏は八月迄左記に滞在。

Co Kyoto mfg Trading Co 31 East 17th St. New York city

N. Y.

○神矢 教親氏 目下米國紐育に滞在せらる。

○矢代 幸雄氏 今般東京高等師範學校講師を囑託さる。

本學期の科外講義

○佛教圖像講傳 講師大村〔西崖〕教授、第一講義室に於て、毎月第一、第三土曜午後一時より二時間。

○美術史上の諸問題 講師矢代〔幸雄〕教授、毎週火曜日午後一時より二時間、第一講義室にて講義は當分人體描寫の研究。

○印度の佛教藝術 講師關野〔貞〕博士、第一講義室に於て、八日、十二日、十五日の三回にて終了、幻燈使用。

東京美術學校近事〔一九一四。T・九・八・二五〕

職員辭令

大正九年六月一日

講師 岡田起作

教員檢定委員會臨時委員被仰付 内閣

工學博士 大澤三之助

本校講師ヲ囑託ス(六月四日) 但建築裝飾法擔任

教授 神矢 教親

敍從七位 宮内省(六月十日)

講師 加藤 精一

(各通)

同 宮内 幸太郎

同 江崎 清

依願解囑(六月十五日)

(宮内技師) 講師 大澤 三之助

陞敍高等官二等(六月十八日)

教授 森 芳太郎

敍從七位 宮内省

助教授 田邊 孝次

敍正八位 宮内省(六月廿一日)

教授 白濱 徹

大正八年度文部省視學委員ヲ命ズ(文部省六月廿三日)

助教授 田邊 孝次

學術研究ノ爲巖手宮城栃木ノ三縣下へ出張ヲ命ズ 但往復共十日間

ノ事(七月一日)

前田 實

佛國在留中彫金ニ關スル調査ヲ囑託ス(七月二日)

野口 吉五郎

東京美術學校雇ヲ命ズ 漆工科勤務ヲ命ズ(七月二日)

○職員動靜

○講師山本正三郎氏 本官たる東京府立工藝學校金屬科長を病氣の

爲先頃辭任せられ今後は本郷區駒込西片町十〔イ〕にの三十の自宅にて専ら製作に従事せらる可しと。

○教授古宇田實氏 文部省留學生として渡歐の途中印度及錫蘭旅行を了へたる同教授は且下古倫母に滞在中の趣近信に見ゆ。

○教授神矢教親氏 目下紐育に滞在研究中の氏よりの本校長宛の近信中より。

(前略) 貴金屬工場を巡廻中に候が、大體日本と同様に一層類似せる所有之候、併し仕上其他製作中出来る限り完全なる機械を應用する點は遙に優り居り候、技巧の方は拙劣なる様見受けられ候、但し形圖案上感服する點多々有之候(中略) 今迄の商店等にて見たる結果にては渡米前の考へと全然反對にして現時一般に贅澤となりしものか、到底日本の比にあらず、充分手間のかりたる高價の品澤山に有之候、殊に寶石入の裝身具等の高價なると其數の多きとには驚嘆するの外無之候 是等の品々は澤山の商店に無數に陳列し *Tea-Set* の如き彫刻を施しある何千弗のもの澤山に併び居り候、而して工場のは等の製作者は手の方は稍拙劣なれども常識あり且相當の學力あるもの多く其給料の如きも非常に高く紳士的態度のもの多く御座候(後略)

○屋代書記の逝去 本校庶務掛主任兼教務掛弓術指南書記屋代鈇三氏は、豫て頸部肉腫の爲め百方療養中の所、咽喉加答兒症、慢性胃消化不良症、心悸亢進症等を併發され、藥石遂に效を奏せず、七月二十日午後七時府下田端の自邸に於て逝去せられたり、享年五十有二、實に痛嘆の至りに不堪、謹んで哀悼の意を表す。氏は明治二年靜岡縣有渡郡馬淵村に生る、明治廿三年十月初めて本校寫字生を申



三代 屋代 鈇三

付けられ、爾來、雇より  
書記に累進し三十三年五  
月十二日庶務掛主務兼教  
務掛を命ぜられ、三十五  
年五月校友會月報編輯主  
任を囑託せられ、本務の  
傍ら本誌の爲め拮据經營  
の任に當られ、三十七年

には氏の最も愛好せし日置流の弓術の允可を受けらる、同年九月教  
務掛主任兼務となる。明治四十年文部省美術展覽會開催せらるゝ  
や、同審査書記を命ぜられ、四十一年に文部屬に兼任し大臣官房會  
計課勤務を命ぜらる。四十二年十一月兼官を免ぜらる、大正六年一  
月東京帝國大學より學生弓術教導補助を囑託せられ、大正七年五月  
學習院講師を囑託せらる、同年八月二十日從七位に敘せられる、同  
年十一月本校弓術指南兼務を命ぜられ、八年二月勳八等に敘せられ  
瑞寶章を授けらる。三月學習院講師を依願解囑となり、九月帝國美  
術院書記を命ぜらる、本年三月一級俸を給せらる。葬儀は七月廿一  
日午前八時麻布區今井町善學寺に於て執行さる。氏は本務の傍ら本  
誌を十有數年の久しきに亘つて編輯せられ、傍ら弓術に堪能にして  
又國風の嗜ありて、屢々詠歌を本誌に發表せらる、又夏期休暇中は  
常に旅行し各地の名山を<sup>跋</sup>渉し、高山植物に就いても造詣深く、常  
に田端の自邸に於て清閑なる生活を送られたるに、今や莫し、悲し  
い哉。

東京美術學校近事〔一九一五。T・九・九・二五〕

○職員辭令

大正九年七月十日

工學博士 關野 貞

本校講師ヲ囑託ス 但東洋建築史擔任ノ事

書記 屋代 鈇三

右本日死去ノ旨遺族ヨリ届出タリ(七月二十日)

學校長 正木 直彦

陸絛高等官一等(八月三十日)

○職員動靜

○白井〔保次郎〕教授 今夏中大阪府下天王寺村に滞在。

○島田〔佳矣〕教授 廣島、岡山、香川、島根、岩手、宮城各縣下  
へ旅行せる。

○結城〔貞松〕教授 北海道旭川へ旅行せらる。

○沼田〔勇次郎〕教授 石川縣下へ講習の爲旅行せらる。

○水谷〔鉄也〕教授 相州三崎二町谷の別莊に滞在せらる。

○松岡〔輝夫〕教授 伊豆修善寺温泉に旅行せらる、因に今般電話  
番町二二三〇番開通せらる。

○矢代〔幸雄〕教授 日光湯本温泉に旅行の上滞在せらる。

○清水〔龜藏〕教授 廣島縣下へ歸省せらる。

○岡田秀教授 九月十七日神戸出帆一ヶ年間外遊の途につかる。

○香取〔秀治郎〕講師 今般電話小石川四五九〇番開通せらる。

○岡田信〔一郎〕講師 牛込區神樂坂町二丁目二三(電番三五九

(二)へ轉居せらる。

東京美術學校近事〔一九一七。T・九・十一・三〇〕

○職員辭令

大正九年九月十日

本校講師ヲ囑託ス 但建築學擔任ノ事

北村 耕造

教授 久米 桂一郎

敍從四位(宮内省)

教授 岡田 秀

文官分限令第一條第一項第四號ニ依リ休職ヲ命ス(文部省)

本年九月一日付願海外旅行ノ件許可ス

休職教授 岡田 秀

歐米歴遊中圖畫教育ニ關スル調査ヲ囑託ス

助教授 伊東 亮次

製版印刷術研究ノ爲滿一年半間英吉利國佛蘭國獨逸國へ留學ヲ命ス(文部省)

同 十一日

講師 渡邊 啓三

圖案科第一部金工科鑄造科漆工科ニ於ケル豫備科主任兼務ヲ命ス

講師 鈴木 信一

圖案科第一部金工科鑄造科漆工科ニ於ケル豫備科主任兼務ヲ免ス

教授 森 芳太郎

光化學寫眞術第三部兼擔ヲ命ス

助教授 海野 清

圖案科第一部工藝製作法彫金兼擔ヲ命ス

講師 久米 福衛

製版科及臨時寫眞科ニ課スル繪畫及圖案兼擔ヲ命ス

同 十五日

教授 藤島 武二

同 結城 貞松

同 長原 孝太郎

同 小林 萬吾

同 松岡 輝夫

同 建畠 彌一郎

帝國美術院美術展覽會審査委員被仰付(内閣)

同 十八日

學校長 正木 直彦

教授 岡田 三郎助

同 島田 佳矣

同 津田 信夫

同 香取 秀治郎

同 辻村 延太郎

同 六角 注多良

同 山本 正三郎

同 大澤 三之助

工藝審査委員會委員被仰付(内閣)

同 十九日

休職教授 岡田 秀

圖畫教育研究ノ爲歐州へ私費渡航ニ付本日東京出發ノ旨届出タリ

同 二十二日

書記 北浦 大介

帝國美術院書記ヲ命ス(文部省)

同 二十五日

助教授 田邊 孝次

教務掛分室主任ヲ命ス

同 三十日

巡視 松井 錠三郎

東京美術學校雇ヲ命ス 監視補助ヲ命ス

同 十月八日

教授 白濱 徹

學術實地指導ノ爲愛知三重奈良滋賀京都大阪ノ二府四縣へ出張ヲ

命ス 但往復共十日間ノ事

同 九日

片岡 照三郎

本校漆工科ニ課スル彫鏤實習ヲ一學期間臨時囑託ス

同 十四日

助教授 小泉 勝爾

學術實地指導ノ爲群馬縣へ出張ヲ命ス

助手 山田 廉

生徒修學旅行ニ付群馬縣へ出張ヲ命ス 但往復共二日間ノ事

同 十五日

助教授 伊東 亮次

文部省在外研究員トシテ本日出發ノ旨届出タリ

同 十六日

教授 白濱 徹

和歌山縣へ出張ヲ命ス(文部省)

同 十八日

教授 結城 林藏

(各通)

同 森 芳太郎

同 小林 龜五郎

學術實地指導ノ爲栃木縣へ出張ヲ命ス 但往復共三日間ノ事

講師 久米 福衛

(各通)

同 成田 隆吉

助手 畑 保之

生徒修學旅行ニ付栃木縣へ出張ヲ命ス 但往復共三日間ノ事

同 十九日

同 助教授 田邊 孝次

同 二十五日

同 除服出仕

同 敘勳二等授瑞寶章

同 同 學校長 正木 直彦

同 二十八日

同 教授 川合 芳三郎

除服出仕

同 二十九日

教授 岡田 三郎助

除服出仕

同 十一月一日

雇 西村 綾雄

右本日午前四時死去ノ旨遺族ヨリ届出タリ

関連事項

① 彫刻教育改革へ向けて

大正五年の東京美術学校改革運動の際、彫刻科は批判の対象の一つとなった。国民美術協会が提出した「東京美術学校改革案」においても「教授の不適任者多きは彫<sup>刻</sup>彫<sup>刻</sup>科を最甚とす」と、彫刻科は手厳しく批判されている。当時は官展で活躍を続けた朝倉文夫、建畠大夢、北村西望をはじめとする実力派が中堅の域にさしかかっていながら、彫刻界のそのような情勢との対比の上で彫刻科の明治三十年代から殆ど変わり映えのしない教授陣に対して批判が起こったのも無理からぬところであった。大正九年二月の建畠大夢の起用、同年三月の関野聖雲の起用、同年十一月の白井雨山の辞職、翌十年五月の朝倉文夫、北村西望の起用と続く一連の人事刷新はこうした批判と関係があり、また、それは時代の流れのしからしむるところでもあった。

人事刷新が進むなかで、彫刻科は教育方法をめぐって大きく揺れ動いた。次の文書にその一端が窺われる。

伺〔大正九年六月十七日 立案者鈴木信一〕

彫刻科実習ヲ左ノ通り定メラレ本年度入學者ヨリ施行相成可然哉

記

一、塑造部実習中ニ木彫実習ヲ加フ

二、塑造部、木彫部生徒ヲ合併授業ス

三、其配當表

彫刻科（塑造部、木彫部）

午前

午後

豫備科 塑造

木炭画

第一学年

塑造

木彫 毎週六時

第二学年

塑造

木彫 毎週六時

第三、四学年 塑造

塑造 塑造部生徒ニ課ス  
木彫 木彫部生徒ニ課ス

備考 木炭画 第一第二学年ニ每学期週間ヲ定メテ之ヲ課ス

コト従前ノ通り

以上

参考〔当時現行彫刻科課程表（本書第二卷612頁）が添付〕  
〔されてゐる。〕

〔趣旨〕

一、午後ノ授業復旧

二、将来塑造部、木彫部ノ部別ヲ廃シ單ニ彫刻科トシ木彫ヲ兼修

セシメ尚上級ニ入りテ木彫ヲ専修セシムルコトヲ得ルヤウ規

則改正希望ノ準備